

ふるさと納税活用事業
国際大学サマーキャンプ 2025 実施報告書

国際大学
学長戦略室

<概要>

昨年に引き続き、南魚沼市から本学へ交付されるふるさと納税を活用し、首都圏の高校生と新潟県内の高校生が共に学び、国際感覚の醸成や異文化理解を深め、国際社会で生きるために必要な知識や能力の基礎を身につけることを目的とした「国際大学サマーキャンプ 2025」を実施した。南魚沼市の豊かな自然や文化を体験できる活動や地域との交流を取り入れ、サマーキャンプの参加者やその関係者が当地への親しみや興味・関心を持つことを促し、南魚沼市のまちづくりに関わる多様な人材の裾野を広げることも目指した。

- 実施期間：2025年7月29日（火）～8月1日（金）
- 実施場所：
 - 国際大学キャンパス（302 教室、301 教室、MLIC ホール、CNP ラウンジ）
 - 株式会社ブルボン魚沼工場
 - （株）魚沼すっぽん
 - 塩沢つむぎ記念館
 - 八海山麓サイクリングターミナル
 - ファミリーダイニング 小玉屋
- 参加人数：14 名（首都圏高校生 2 名、市外高校生 2 名、市内高校生 12 名）
- 参加費用：宿泊あり 25,000 円／宿泊なし 3,000 円
- 宿泊先：たもん荘
- バス運行：昭和観光（株）
- ファシリテーター：9 名（南アジア地域 7 名、東南アジア地域 1 名、アフリカ地域 1 名）

<詳細内容>

参加者は4日間、基本的に4つのグループに分かれて講義やグループワークに取り組み、最終日にはグループごとにプレゼン発表を行った。

【1日目】

開会式

1. 開会の言葉

- ・大学関係者の紹介
(橘川学長、加藤副学長、木村代表業務執行理事、佐野理事長補佐、Ahmed 特別招聘教授、舟橋准教授)
- ・ファシリテーターの紹介
- ・サマーキャンプの意義の説明



2. 歓迎の挨拶（橘川学長）

サマーキャンプへの参加に対する感謝とともに、約70ヶ国から学生が集まる国際大学の特徴、そしてぜひ躊躇せずに英語をたくさん使用し、サマーキャンプの4日間を過ごしてほしいとの期待が述べられた。



3. 国際大学の紹介

国際大学の概要や学生生活について英語で紹介した。

4. 参加者への激励のメッセージ（加藤副学長）

サマーキャンプ期間中に英語を使って世界中の人たちと何を話したいのか、世界へ何を発信したいのか、についてぜひ考えてほしい、との期待が述べられた。

ウェルカムパーティ

各高校から集まった参加者はファシリテーターや大学関係者とともに、日本語と英語を交えて交流を深めながら、これから始まるプログラムに向けてのモチベーションを高め、期待感を膨らませた。参加者は少し緊張が見られたが、ファシリテーターが積極的に声掛けを行い、互いに友好を深める姿が見られた。



Cross Cultural Communication（国際経営学研究科 Mohammed K. Ahmed 特別招聘教授）（英語）

アイスブレイクでは「DOB（Date of Birth） Circle」を実施し、参加者が教室内を動きながら自己紹介し合い、誕生日順に円を作ることによって自然な交流と一体感を生み出した。

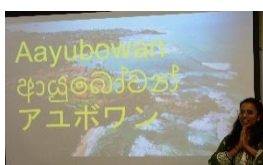
講義前半では、教授の出身国バングラデシュと日本の食文化の違いを題材に、異なる文化的背景による多様な価値観や感情の捉え方について対話形式で議論。後半はカルチャーアイスバーグを用い、日本とアメリカの文化の違いを例に、社会的規範や価値観の形成過程を探った。まとめでは、目に見える行動の背後にある価値観やアイデンティティを理解し尊重する重要性が強調され、「How are you feeling?」の掛け声に元気に応えて講義を締めくくった。



留学生の出身国（地域）・課題紹介（舟橋學准教授・ファシリテーター9名）（英語）

舟橋學准教授から、サマーキャンプの4日間で考えてほしいこと、最終日のプレゼン発表の説明がなされた。留学生から紹介されたそれぞれの国や地域が抱える課題を4日間の講義やフィールドワークでインプットした知識を基にグループで話し合っ課題解決を考える、との説明が具体的に述べられた。

その後6か国・地域出身のファシリテーター9名による出身国（地域）およびそれらの地域が抱える課題の紹介が英語で行われた。各国の食や文化、自然などに加えて、顕在化している社会問題についても説明がなされた。



バーベキュー（八海山麓サイクリングターミナル）

八海山麓サイクリングターミナルでバーベキューを楽しんだ。ファシリテーターは、自身の出身国（地域）紹介に関するクイズや伝言ゲームを主導し、参加高校生を楽しませるとともに、連帯感を育んだ。

【2日目】

日本の国際協力（国際大学副学長／国際関係学研究科 加藤宏教授）（英語）

「国際協力（援助）は必要か？」という主要テーマのもと、国際協力（援助）の具体例や実際に日本が行っている取組みが紹介された。また ODA（政府開発援助）のデータを用いて、日本の世界における位置づけを確認し、その活用事例も提示された。これらを踏まえ、なぜ国際協力を行うのかについてグループごとに議論した。参加者は、ファシリテーターの出身国（地域）での日本の取組みについて質問したり、援助を受ける立場からの意見を聞いたりしながら、その必要性について考え、自らの意見を発表した。

また、これからの日本の国際協力が何を目標しているのかについても言及され、日本の生産年齢人口が減少していく中で、途上国の活力を日本の成長に結びつけ、日本社会・経済の持続的発展とともに、途上国の社会・経済発展に寄与することの重要性についても学んだ。



Sustainability（国際経営学研究科 舟橋學准教授）（英語）

講義の冒頭では、テーマである「サステナビリティ」の全体像が示され、特にカーボンニュートラルに至る経緯や循環経済の仕組みについて説明が行われた。従来の「Reduce・Reuse・Recycle」に加え、新たな概念である「Regenerating（再生型）」を含めた世界各国の事例が紹介され、持続可能な社会への多様なアプローチが示された。また、ネイチャーポジティブの考え方や人権に関する取組みも取り上げられ、企業や団体が具体的にどのような活動を行っているかが紹介された。参加者たちは、各国の先進的な事例や多様な視点に触れながら、最終発表の課題である「地域資源を活用して世界の課題解決を考える」ための多くのヒントを得ることができた。



有識者レクチャー「国際人とは？」（独立行政法人 国際協力機構 JICA 東京次長 湯浅あゆ美氏）

ご自身の世界に関心を持ったきっかけや国際機関でのキャリア形成について紹介があり、「国際人」とは何か、そしてその立場で何を達成したいのが参加者に問いかけられた。開発途上国の現状やウェルビーイングにも触れ、多様な言語や製品の原材料の産地を確認する

アクティビティを通じて、世界の相互依存関係を学んだ。また、日本の多文化化を見据え、文化や習慣を押し付けず違いを尊重し交流する姿勢の重要性が強調された。全員女子高校生であった参加者は、世界で活躍する湯浅氏の話に熱心に耳を傾けた。



近隣企業・地場産業見学／株式会社ブルボン 魚沼工場

株式会社ブルボンの魚沼工場を訪問し、工場の概要や製造している商品の説明を受けた。魚沼工場で採用している2種類の雪室貯蔵の仕組みや、カカオ豆を雪室で貯蔵する理由について紹介があり、カカオ豆の貯蔵期間を試食実験で決定するなど、綿密な研究を重ねて製品化していることが説明された。参加者にとって身近なブルボンのチョコレートが、こうした研究を経て作られていることを知る貴重な機会となった。また、実際に雪室貯蔵庫を見学し、雪国特有の



気候条件を活かした伝統文化と、自然環境と調和した持続可能な技術の実例を体験することができた。

近隣企業・地場産業見学／（株）魚沼すっぽん

地元の地域資源を活用した社会課題解決のヒントやアイデアを得ることを目的に、スッポン養殖事業に取り組むスタートアップ企業「（株）魚沼すっぽん」を訪問した。同社は飼育水に温泉を活用し、餌には市内酒蔵で産出される酒粕を使用することを特徴としている。屋外水槽でのスッポン飼育の様子を見学しながら、代表取締役の井口氏より、起業に至る経緯やスッポンに着目した理由、これまでの経験や失敗談を交え、事業の現状、今後の課題や展望について説明があった。参加者は、世代の近い若手起業家の話に熱心に耳を傾け、活発な質疑応答が行われた。



【3 日目】

近隣企業・地場産業見学／塩沢つむぎ記念館

地元の織物の伝統技術や文化を学ぶため、塩沢つむぎ記念館を訪問した。館主の南雲氏より、同市の地場産業であり日本の伝統文化の一部を成す塩沢織物の歴史や、繭から糸、布、着物へと至るまでの工程について詳しい説明を受けた。またグループごとに織物体験および塩沢紬の布を用いた小物づくり体験を行った。塩沢紬の深い歴史と伝統技術に触れ、製作過程を学びながら実際に手を動かすことで、日本の伝統文化への理解を深めるとともに、その美しさと技術の奥深さを実感することができた。あわせて、地域の伝統産業の重要性と継承の必要性を再認識する貴重な機会となった。



国際協力の経験（ISEP 学生 2 名）

前半は、ISEP 学生 2 名の海外経験がそれぞれ共有された。

網代氏からはカンボジアでの体育指導や、JICA 海外協力隊としてウガンダで体育・野球を教えた活動について紹介があり、国際協力においては一方通行や上から目線ではなく、互いを尊重した対話の重要性が強調された。安楽氏からは、JICA 海外協力隊としてキルギスで英語、モザンビークで陸上を指導した経験が共有され、日本との文化・教育の違いや、幸福の感じ方の相違についても言及があった。

後半は、2 つのグループに分かれ、それぞれに網代氏と安楽氏が参加し、リラックスした雰囲気の中で食べ物や治安面などの生活についての質問から教育問題についての質問まで活発に質疑応答が行われた。



グループワーク（国際経営学研究科 舟橋 學准教授／ファシリテーター9 名）（英語）

留学生の出身国紹介で知った世界の課題の中から、各グループがより深く掘り下げ、課題解決に向けて議論したいテーマを選定した。選んだ課題については、課題として挙げた背景や未解決である要因を分析し、地域資源を活用した解決方法を検討した。3 時間にわたる長時間のグループワークであったが、参加者とファシリテーターは時間を忘れ、英語で活発なディスカッションを続けた。



【4 日目】

グループ発表（英語）

サマーキャンプの総括として、世界の課題解決策についてグループ発表を行った。（以下、発表順に各グループの発表内容を記載）

☆ グループ Hikari「人間と野生動物との共存に関する課題」

地 域：スリランカ

現 状：・人間とゾウの急増により、土地資源の共有が困難化
・2019 年以降、毎年平均 125 人と 370 頭のゾウが死亡

問 題：①命の損失、②作物被害、③生息地の喪失

⇒①に焦点を当てる

解決方法：・政府による支援（象を保護できる他国の施設への輸送）

・地域主体の解決策

-象の苦手な蜂を使用する

-大きな岩や象避けの装置を町のあらゆる箇所に置く



☆ グループ Sakura「失業率の問題」

地 域：バングラデシュ

現 状：失業人口が多い

要 因：①就職先の不足

②就職に必要な技術の不足

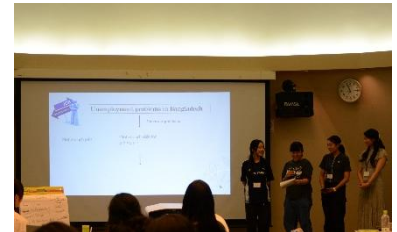
③高い競争率

解決方法：1. 塩沢紬のような手織物工場を設立する。

2. 農業や繊維を専門に学んだ大学卒業者を日本に招き、技術指導を行う。

3. 彼らはバングラデシュに戻り、技術を伝授し製造を開始する。

4. 製品を競合が少ない欧州およびその他の国々へ販売する。



☆ グループ Hanabi「すべての人へ教育を」

地 域：インドネシア

現 状：貧困が教育の大きな障壁となっていて、多くの子どもが十分な教育を受けられていない。

要 因：①施設の不足、②貧困、

③子どもの教育に対する親の意識の低さ

解決方法：1. NGO 教育に対する保護者の意識向上を支援するため、ボランティアを派遣する。

2. 企業 発展途上地域へ投資する。

3. 外国 経済的支援をする。

4. 政府 日本のふるさと納税のような取り組みを実施する。

5. 現地の人々 無料で授業を行う、寄付



☆ グループ Kakehashi「質の高い教育による幸福」

対 象：後発開発途上国および開発途上国

現 状：多くの子どもが貧困、性別による偏見、資源不足により質の高い教育を受けられていない

要 因：①貧困、②脆弱な政策、③不平等

解決方法：1. インフラの改善

2. 先進国の専門家が、途上国や後発開発途上国で教師と生徒の研修を行う

3. 国連は生徒に学習教材を提供する

4. 開発途上国と後発開発途上国は教育課程と教授法を改善する



閉会式

1. 挨拶（加藤副学長）

加藤副学長 挨拶（要旨）

このたびは、国際大学のサマーキャンプにご参加いただき、ありがとうございました。皆さんが楽しんでくれていることが嬉しいです。

このプログラムの目的は、「国際的に活躍できる人材」を育てることです。英語力はもちろん大切ですが、必ずしもそれが「国際人」の本質ではありません。英語以上に大切な3つの要素について、皆さんに伝えたいと思います。

倫理観（Ethics）

世の中の問題に対して「おかしい」と気づき、「こんなことが許されてはいけない」と思うこと
行動力と情熱（Power, Passion）

問題に対して実際に行動に移す力や情熱

分析的な思考力（Analytical Skills）

物事を知的に分析できる力

皆さんは今回のプレゼンテーションを通じて、これらの力をすでに発揮してくれました。とても論理的で、社会課題に向き合う姿勢があり、心から感心しました。

英語は大事ですが、それだけにとらわれず、「どうすれば世界に貢献できるか」をこれからも考え続けてほしいです。

2. 証書授与（加藤副学長）

参加者一人ひとりに加藤副学長より修了証書が授与された。

3. 参加者代表挨拶（市内1名、市外1名）

市外参加者の感想（要旨）（英語）

こんなに英語を話したのも、英語を使って友人を作ったのも初めてでした。初めはとても大変でしたが、だんだんと楽しくなりました。これからももっとほかの国の方々と話していきたいです。本当にサマーキャンプは素晴らしい経験になりました。ありがとうございました。

市内参加者の感想（要旨）

サマーキャンプを通して、楽しかった思い出だけでなく、英語をうまく話せなくても「伝えようとする姿勢」の大切さを学びました。単なる英語力ではなく、チャレンジする気持ちや、苦手なことにも向き合う勇気、そして意見交換に取り組む中での知識が自分の中にしっかりと身についたと感じています。本当にありがとうございました。

4. 閉会の挨拶（舟橋學准教授）

舟橋學准教授からのメッセージ（要旨）

4日間、本当にお疲れ様でした。特にグループディスカッションでは、皆さんが想像以上に熱心に取り組み、休憩の時間も惜しんで議論を続けていた姿に、運営側としてとても感動しました。

これから高校生活やその先の進路の中で、また今回のように「考え抜く場面」がたくさんあると思います。そのときにはぜひ、今回経験したようなプロセス——「問題は何か？」「原因は何か？」「なぜ？なぜ？なぜ？」と掘り下げていく思考——を活かしてほしいです。

大人になっても、課題を見つけ、課題の背景を考え、新しい発想で解決に向かうという流れは変わりません。今回の経験を一つのステップに、ぜひ自分の関心のある分野で力を伸ばしていきましょう。

ありがとうございました。

フェアウェルパーティー

昼食を兼ねたフェアウェルパーティーを開催した。参加者は達成感や充実感を味わいながら、サマーキャンプの思い出や翌日以降の夏休みの予定について、4日間で絆を深めた仲間たちとの会話を楽しんだ。

<まとめ>

「国際大学サマーキャンプ2025」では、国際関係・経営に関する専門的な講義、有識者によるレクチャー、学生の体験談を通じて、異文化理解や国際協力、SDGsなど、国際的に活躍するために重要なテーマについて学んだ。また、地元企業や産業の見学を通じて、地域資源の活用に関する理解も深めることができた。グループディスカッションにおいては、世界の課題に向き合う姿勢を養い、自らの意見を持ち、それを他者に伝える力、さらには協働による課題解決のプロセスを体験した。異文化交流を通じて、参加者は国際的な視野を広げる機会を得ることができた。

さらに、南魚沼市との交流を通じて、地域文化や歴史への理解を深めるとともに、地域とのつながりの重要性を実感する貴重な機会となった。本キャンプは、地域の魅力発信や、多様な人材の育成にも資するものであったと考える。

本キャンプは、参加者および運営側の双方にとって、極めて意義深いものであった。最後に、本プログラムの実施にあたりご協力を賜った南魚沼市をはじめ、地域の皆さま、ご家族、関係者の皆さまに心より感謝申し上げる。今後も、地域と大学が連携し、学びと成長の機会を提供し続けていく所存である。

以上